

〈研究主題〉

(3) 「新しい時代を切り拓く心豊かな生徒の育成をめざして」  
一人権や生命を尊重する心を育てる取組を通して

御所市立葛上中学校

## 1 はじめに

道徳性の育成は、道徳の時間はもとより、すべての教育活動の中で行われるべきである。つまり、生徒に「豊かな人間性」を育てるためには、学校の全教育活動を通じて道徳教育を行う必要がある。しかし、本校において、学校生活の中で、生徒たちが様々な道徳的価値に気付いたり考えたりする活動や場面を十分に保障できているとは言えない。

そこで、本校では、道徳の時間と他の教科や領域の学習との関連性を考えた道徳教育推進のためのプログラム作成や、道徳の時間における生徒の主体的な学習を促す授業構成・方法の工夫等の研究を行い、道徳教育の推進に取り組んできた。

## 2 研究課題

- 生徒自らが課題に取り組み共に考えようとする道徳教育の推進
- 体験活動等を生かした多様な取組の工夫による道徳教育の充実
- 生命を尊重する心を育てる道徳教育の充実

## 3 研究の特色及び概要

### (1) 葛上プログラムの作成

「道徳教育は、すべての教科・領域で行われるもの」である。しかし、そのために計画的に進められるべき道徳教育が、なかなかそうできてはいない本校の現状があった。そこで、まず、本校の生徒の実態から、重点的に指導していく内容を検討し、テーマとして明確化した。

道徳の時間では、テーマに基づいて「道徳的価値を内面化すること」と「主体的な価値表現や価値判断」の2つにねらいを置いた授業構成にした。また、道徳の時間の内容項目と関連する学校行事（学年による活動）等の体験活動を計画的に近い時期に組み込んだり、他の教科等の学習内容との関連を考えたりして、テーマに基づいた全体学習計画を作成した。このような枠組みをもつプログラムを葛上プログラムとし、学校全体で実践した。

このプログラムを実践することによって、学校の全教育活動を通じて道徳教育を計画的に推進することができると考えた。また、道徳の時間が、生徒にとってより深まりのある学習となると考えた。

#### 葛上プログラム基本原則

- 道徳の時間では、テーマに沿った同一の内容項目の授業を2週続けて行う。
- 道徳の時間とその他の教育活動の意図的な関連をイメージ図（表）によって明確にする。
- テーマに沿った体験活動を道徳の時間の前後に組み込む。

ア. 道徳の時間において同一の内容項目の授業を2週続けて行う。

道徳の23の内容項目のうち、生徒の実態に即して、生徒に育成したい内容項目を、道徳の時間で2週続けて行うことを原則としている。このことで生徒は、内容項目をより深く学習することが可能になり、指導者にとっても育成したい道徳性がより明確化され、道徳の時間に深まりをもたせることが可能になると考えた。

#### イ. 道徳の時間とその他の教育活動との関連イメージ図（表）の作成

テーマに基づき、道徳の時間とその他の教育活動の関連をイメージ図（表）にあらわすことで、道徳の時間とその他の教育活動との関連性を明確にすることができる。また、担任以外の教員も道徳の時間の学習内容、道徳の時間と他の教育活動の関連が全体像としてわかる。

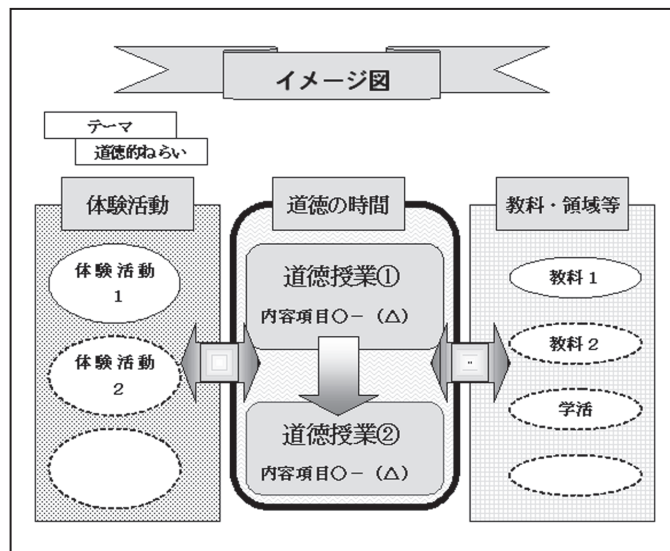
これらによって、すべての教員がテーマに基づき道徳教育を推進しているという自覚が生まれると考えた。

#### ウ. テーマに沿った体験活動を組み込む。

プログラムを計画する際、テーマに沿った学校行事（学年による活動）等の体験活動を、意図的に組み込むようにした。

また、実施時期については、2週続けて行う道徳の時間と体験活動との相互の関連を図るため、ほぼ同時期に実施するように配慮した。

※右図はイメージ図の基本的な形式



※右図の道徳授業①は1週目、道徳授業②は2週目の道徳の時間を示す。

### (2) 道徳の時間の授業構成「クローズド・エンド型授業とオープン・エンド型授業」

伊藤啓一氏は、『生きる力をつける道徳授業』＜※注(1)＞の中で、A型・B型の道徳の授業構成について述べている。A型の授業とは、「ねらいとする道徳的価値」を教える（内面化）することを第一義とする授業、B型の授業とは、「子どもの個性的・主体的な価値表現や価値判断」の受容を第一義とする授業である。本校では、伊藤氏の理論に依拠し、これらの型を意識した授業を行っている。

伊藤氏の提案するA型授業とB型授業の授業を組み合わせることによって、生徒個々の意見が反映される場面や生徒個々の考えを深める場面を多く設定することが可能となる。このことによって、生徒の発言を促し、生徒の主体性を重視した道徳の授業が行えると考えた。また、指導者にとってもA・B型それぞれの授業構成に基づき、道徳の時間を行うことによって、1時間の授業が生徒の主体性を尊重した学習になっているかなど、授業が適切に行われたかどうかを客観的・分析的に捉えることが可能になる。

以上のことから、本校では、A型授業をクローズド・エンド型授業、B型授業をオープン・エンド型授業として道徳の時間を構成し実践した。

### (3) 道徳の時間の工夫

#### ア. 授業形態の工夫

道徳の時間は、道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深め、自分のこれからの生き方・あり方を考える時間である。道徳の時間においては、生徒個々の道徳的心情や道徳的判断力を高めることが必要であり、道徳的価値は、教師が決して押しつけるものでなく、生徒が主体的に考え、他者

の意見を聞き合う中で気付き、深めていくものである。そのために、具体的な学習形態として、班での話し合いや意見発表、互いの顔が見合えるような話し合いの場の工夫、ワークシート交換等による意見交流などを取り入れるようにした。

#### イ. 発問の工夫

道徳の時間では、自分の体験を振り返り、そのときの自分の思いを確かめたり、これからの自分自身がよりよく生きるためのあり方を考えたりすることが大切である。そのためには、自分とのかかわりの中で道徳的価値について考えられるような発問が大切である。そこで、道徳の時間の発問については、以下の点を意識して行うようにした。

- 抽象的な発問ではなく、具体的な発問を行う。
- 主人公等の行動を問うのではなく、内面的な心情を問う発問を行う。
- 生徒それぞれの生活と重ね合わせることができる発問を行う。

#### ウ. 資料の選定について

道徳の時間における資料は、生徒の心情を高め、授業のねらいを達成する上で重要である。本校では、資料選定の視点を以下のように考えた。

- 生徒の興味・関心に応じた資料
- 生徒の発達に適合した資料
- 生徒が深く考えたり心をうたれたりする資料
- 生徒の身近な生活につながる資料

なお、資料については、読み物資料・ビデオ・漫画・歌・詩・新聞記事などを中心資料とし、補足及び補説のための資料写真、「心のノート」等も適宜利用している。なお、各学年同様の資料を使う場合、学年それぞれに応じたねらいを定め、授業展開を行うように工夫した。

### (4) 生命尊重の学習にかかわる指導の視点と学習内容の視点

#### ア. 生命尊重の学習にかかわる指導の視点

主として自然や崇高なものとのかかわりに関する内容の中で、生命についての学習の視点として、中学校学習指導要領「道徳」では、以下のように示されている。

内容項目	指 導 の 視 点
3-(2)	生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重するようにする。

例えば、人間と自然についての関係やかかわりを考えることを通して、自然のすばらしさや偉大さ、また、人間の有限性に気付いたり、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を感じたりすることができる。このことを基盤にしながら、人間を含むすべての生命の存在意義を考える。さらに、自他の生命を大切にしたい生き方についても、広く考えさせていく。

#### イ. 生命尊重の学習にかかわる学習内容の視点

生命尊重の学習については、様々なアプローチが考えられ、また、生命については、幅広く捉えることが可能なことから、道徳の時間においては、生命について考える視点を明確にして、学習を行うことが必要である。生命尊重の学習を行う場合、道徳の時間を中心に以下の視点を大切にしたい授業を展開した。

【本校における生命尊重の学習の視点】

- 「生命」の力強さや不思議さ（強さ）
- 「生命」はなくすとともに戻すことができない（非可逆性）
- 「生命」には限りがある（有限性）
- 「生命」は周りの人たちや生き物に支えられている（横のつながり）
- 「生命」は受けつがれてきたものである（縦のつながり）
- 「生命」は授かったもので、人間の力を超えたものである（偶然性）

<※注(2)>

(5) 人権尊重の学習にかかわる指導の視点と学習テーマ・内容

ア. 人権尊重の学習にかかわる指導の視点

主として集団や社会とのかかわりに関する内容の中で、人権尊重の学習の視点の一つとして、中学校学習指導要領「道徳」では、以下のように示されている。

内容項目	指 導 の 視 点
4-(4)	正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、社会連帯の精神をもって差別や偏見のないよりよい社会の実現に尽くすように努める。

私たちは様々な社会集団の中に存在し、生きている。社会集団の中で生きている限り、社会集団の一員として生きるということはどういうことなのか、社会をよりよくしていくためには、自分に何ができるのか、自分はどうすればよいかを考える必要がある。特に、よりよい社会を実現していくためには、差別や偏見によって、人権が保障されていない社会の現実に向け、自分と社会のかかわりについて考えることが重要である。このことが、国際社会に生きる日本人としての自覚に立ち、平和的で文化的な社会及び国家の成員として必要とされる道徳性の育成につながることになる。この内容項目を深めることによって、差別や偏見を許さない社会の実現をめざす生き方について広く考えさせることができる。

イ. 人権尊重の学習にかかわる学習テーマ・内容

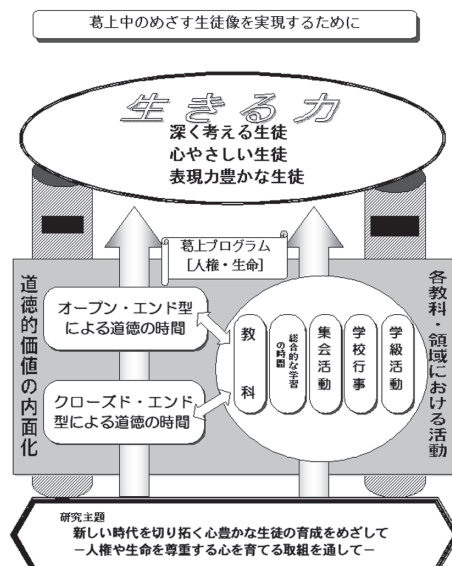
人権尊重の学習では、人権について正しい知識を身に付けるとともに、互いに認め合い、支え合うことのすばらしさを感じ取ることが大切である。同時に、社会の中に存在する差別・偏見・不合理・矛盾等に気づき、考えることが大切である。これらのことは、道徳教育を進めていく上で不可欠な要素である。

本校でも、副読本「なかま（奈良県人権教育研究会編）」等を題材に人権尊重の視点を大切にして道徳教育を展開してきた。特に、道徳教育の学習指導要領に示された生命尊重にかかわる内容項目3-(2)や公平、公正な態度に関する内容項目4-(4)を重点課題としてきている。

(6) 保護者・地域との連携を深めるために

保護者・地域に本校の道徳教育の取組を伝えきれていなかった現状がある。今回の研究を深めるためには保護者・地域との連携が必要である。保護者・地域と連携するためには、本校の道徳教育の取組を理解していただくための情報発信はもとより、保護者・地域の人々の思いや願いを受けとめることも重要である。これらのことを踏まえ学校・保護者・地域が一体となって本校の道徳教育を推進する方法について考えた。

## 4 研究のイメージ図



- 【注】(1) 伊藤啓一編著『「生きる力」をつける道徳授業』明治図書1996. 12pp. 28-29  
(2) 島 恒生『「命」をどう指導するか』(道徳教育 No.561) 明治図書2005. 5pp. 12-14

## 5 研究の成果と今後の課題

### (1) 葛上プログラムの実践について

#### [成果]

- 葛上プログラムを計画し、道徳の時間とその他の教育活動の関連イメージを具体的な図表であらわすことによって、学級担任だけでなく教科担任や学年集団さらには全教職員が具体的な計画のもとで道徳教育に取り組んでいるという共通認識がうまれた。また、本校のめざす生徒像の実現のためにはどのような取組が必要かを、学校・学年で活発に議論できた。
- 他の教科や教育活動における指導においても、全教職員が道徳教育との関連を考え、それぞれの指導の中で、道徳的視点を意識した指導を行う効果をもたらした。

#### [課題]

- 学校・学年の行事等の実施時期や教科等の年間指導計画を踏まえた、道徳の時間とその他の教育活動の連携を踏まえた一年間のプログラムを作成する必要がある。
- プログラムをさらに発展させていくためには、人権・生命をテーマにしたプログラムを実施するだけでなく、生徒の実態に応じたテーマで新たな葛上プログラムを作成していく必要がある。

### (2) 道徳の時間の授業構成について

#### [成果]

- 指導者が、クローズド・エンド型授業とオープン・エンド型授業を取り入れることによって、授業構成の方法が明確になった。また、生徒の道徳的価値の自覚の様子を、2時間の道徳の時間を通して、生徒の発言内容やワークシート、感想文などから見取ることができた。
- 近接している2時間の道徳の授業の中で、道徳的価値を多様な視点から考えさせることができた。また、テーマとする内容について集中的に取り組むことができ、生徒の考えをより深めることにつながった。

- 主人公等の心情面を問う発問を中心に授業を構成したことで、より自由な生徒の発言を促すことができた。また、相手の考えを受け止めようとする雰囲気がクラスに生まれ、それぞれの意見が素直に出せるようになった。

[課題]

- オープン・エンド型やクローズド・エンド型の授業を行う際に、どのような資料が適切なのかを学年間で論議していく必要がある。また、新たな資料の発掘・開発を今後も継続して行う必要がある。
- ねらいに迫るためには、どのような資料を取り上げどのように展開していくことが効果的なのか、また、どのような資料を補助的に使えば生徒がより主人公等の心情に迫れるのか等、道徳の時間の資料選びや授業展開の工夫等についてさらに研究していく必要がある。

## 6 終わりに

2か年にわたり本校では、「新しい時代を切り拓く心豊かな生徒の育成をめざして一人権や生命を尊重する心を育てる取組を通して―」を主題に研究を進めてきた。その中で、学校総体として研究を進めていく必要性を再確認することができた。その象徴が葛上プログラムの作成であり、そのプログラムを提案してきた意義は大きい。また、保護者・地域の支えによって、より豊かに道徳教育を展開することができ、連携の大切さが改めて明らかになった。わずか2年に満たない短い研究であり十分な成果が得られなかった点も多いが、今回の研究の成果と課題を踏まえ、さらに本校の道徳教育を継続、発展させていきたい。